

法藏を千載に留めん

——訳経・写経・刻経——

岡 部 和 雄

教室での私の最終講義は、昨年十二月十五日の「仏典講義I」で本当は終わりました。本日は仏教学部の恒例の行事とはいえ、わざわざ私どものために、こういう会を開いていただきましてありがとうございます。

私のテーマは、標題に掲げましたように、千年に及ぶような話、雲をつかむような話を申し上げようとしていますので、何を話しているのか分からなくないうように、資料を作らせて頂きました。与えられた時間は一時間ほどでございますので、どこまでお話できるか、心もとないのですけれども、だいたい資料にそつてお話を申し上げたいと思います。よろしくお願ひします。

まず、標題に掲げました、「法藏を千載に留めん」の言葉の出典でございますが、これは、私の言葉ではございませんで、お借りした言葉でございます。「留法藏於千載」（大正藏五五、六六b）は、僧祐（四四五～五一八）の『出三藏記集』という、中国南北朝の南朝、梁の時代にできた書物の中に書かれている言葉でございます。梁時代につくられた、現在残っている經典の目録の中では、もっとも古いものがこれであります。この『出三藏記集』卷九所収の慧觀法師という人の「修行地不淨觀經序」というものの中に出でまいります。かれは東晉から劉宋のはじめにかけて活躍した学僧で、この經は「達摩多羅禪經」の名で知られ、慧遠（三三四～四一六）も「禪經序」かきました。

千年もこの教えを長らえさせたいという言葉の意味がよくでているというわけで、この『出三藏記集』そのものが、いわば、訳經史研究の古典の第一号みたいな本でございますので、この著者および著作に敬意を表する意味で、この言葉をお借りすることにいたしました。

そこで、この法藏という言葉ですが、dharma-pitakaといふ言葉だつだかどうかは分かりません。dharma-pitakaとい

う言葉はあまり一般的に使われない言葉のようですが、三藏の中にアビダルマピタカという呼び方がありますので、ダルマピタカという呼び方をしてもらいかと思い、使わせて頂きます。ダルマコーシヤ (dharma-kosha) という言葉も法藏と訳されているようですが、ここにはダルマピタカがよいと考えます。法藏とは、いうまでもなく仏所説の經典(仏教聖典、仏典)のことで、法寶(dharma-ratna)、ダルマラトナという言葉と同義語的に用いられます。中国では、二つの言葉は同じように用いられていると考えられます。

そこで、サブタイトルの訳經、写經、刻經ですが、經典を訳したり、文字で書き写したり、その文字を木や石に刻みつけたりすることです。これらは、すべて、仏説が、仏によつて説かれた教えが、この地上から滅びることがないようにと願つて行われた、仏教徒の信仰と努力のたまもの、結晶であると思います。

中国では、先ほど学部長先生もお話になられましたが、漢訳仏典、漢訳經典というものを軸にして、中国はもちろんのこと、東アジアの漢字文化圏の国々にも様々な形で仏教が展開したというように考えられます。もちろん、その中には經典の文字と、それから仏の悟られた悟りは違うという考え方が出できまして、不立文字を標榜する禪宗なども出ました。しかし、それも經典の翻訳というものがあればこそ出てきた。

わけでありまして、經典の翻訳が非常に権威を持つて受け止められてきたという歴史的な事実があつてはじめて起つたわけですから、經典のことばや文字に縛られることに反発した禪宗といえども、この展開の一形態にすぎません。そういう意味では、禪宗も含めて中国仏教の展開は、漢訳の典籍を軸にしたということは言えるかと思います。それで、「千載」という言葉に関してですけれども、載とう字も、一歳、二歳の歳、歳月の歳、みな同じ意味に使うそうです。ですから、「千載」とは、「千年」という意味であります。

訳經は、後漢の安世高から宋の法護・惟淨までほぼ一千年続きます。一宗教の聖典がこれほど長期にわたつて大量に翻訳された例は、ほかにないでしょう。もちろん元・明・清時代にもぼつりぼつりと翻訳はありますけれども、しかし、その時代はもうインンド仏教が滅びていますので、インンドから經典が来るとは考えられない。チベット訳のものが訳されたり、あるいは西域の俗語で書かれたものが伝訳されたりするだけで、非常に散發的であります。ですから、訳經はだいたい千年と考えていいのではないかと思います。

それから、經典を書くこと、筆写すること、これも訳經に伴つたことでありますので、翻訳が始まるとすぐに、文字でそれが記録されるということがおこるわけですから、これが

千年。千年といいますのは、筆写された時代の後には、今度は木版刷りの時代が来ますので、それが始まるまでの千年ですね。つまり、翻訳された經典は書写され、写本(写經)として伝承・流布したのであるから、写經の歴史も、訳經の一千年とほぼ重なると考へてよいでしょう。

また、刻經(印經)の千年ですけれども、經がほとんど木版(木板)で印刷される時代は、宋代に起るわけありますから、宋代の頃から近代にいたつて活版印刷にとってかわるが、この刊本(刻經)時代もだいたい十世紀あります。十世紀から二十世紀までですから、千年続いたということになります。だから、この千載というものは、訳經についても写經についても刻經についてもいえるのではないかと思ひます。

また後で少し詳しくとりあげる石刻經(房山石經)も、隋代にはじまり、明・清まで刻り続けられたので、これも一千年にわたる、驚異の事業といえます。まさしく「法藏を千載に留めん」ということばに照応しているように思われます。

次は、經典の翻訳部数がどれだけ、どういう形で増えていったかということを、ちよつとだけ申し上げておきます。

まず、最初に後漢(一世紀半ば)から訳經が始まつて、三国時代を経て西晋時代までに經典の翻訳がだんだん増えて行くわけです。三七四年に作られた釈道安の經典目録、『道安錄』がありますが、これは現在失われて無いのですけれども、そ

れには六〇〇部近い經典・經論が記されていましたことが判つております。ですから二〇〇年くらいの間に六〇〇部近い經典の翻訳が、すでになされていたということになります。

そして、東晉・南北朝時代になると、ますます多くの仏典が伝来・翻訳された。隋代のはじめ六〇二年に作られた『仁寿錄』ですけれども、これには、六八八部二五三三卷という数字がでてまいります。つまり、六八八部二五三三卷の經論が現存していたという。なお、この闕本録に三七八部六一六卷、別生・疑偽をあわせたものが一〇〇〇部以上と記されているから、『道安錄』にあつた半分以上の經論は、このときすでに失なわれていたことになります。数字の上ではわずか一〇〇部足らずしか増えていないようにみえますけれども、しかし、實際は、この期間はたくさんのが經典が翻訳されておりまして、翻訳されてあつたにしても、それが全部残つているとはかぎりませんので、欠本になつて失われてしまうことがあります。中身が入れ替わっているというふうに考えますと、この期間にもまた、たくさんの經典が訳されたということになります。

それから、有名な『開元釈教錄』(七三〇年)です。この『開元錄』の入藏録は、一〇七六部五〇四八卷としています。「五千余卷の一切經」といわれるものがこれで、大藏經とい

うかたちで、全ての經典というときには五千余巻という言い回しが、中国ではこの時代以来ずっと行わるようになります。それのもとになつたのが、この五〇四八巻であります。巻数では『仁寿錄』のそれに倍増しているから、隋から唐にかけてこの一〇〇年あまりの翻訳經典がいかに盛んだつたか、翻訳事業が栄えたかということを示していると思います。

經典、論書、そういう仏説を集めたもの、集成したものを、中国でどういう言葉で呼んだかというと、最初は「衆經」と呼んでいたようです。もろもろの經。そのうちに「一切經」と呼び名ができる、最後に「大藏經」という呼び名が定着してゆくわけです。經論を集成したものを「一切經」「大藏經」などと呼ぶようになるのは、隋代以降であり、勅命によつてそれを完備する時代に入った。今日では、「一切經」も「大藏經」も両方とも使われております。

中国の古写經のうち、紀年のあるものは三九四点に上るが、このうち、六朝の写經（三・六世紀）が二三四点、隋唐の写經（七・九世紀）が二二三點、五代・宋初の写經（十世紀）が三七点です（中田勇次郎・平野顯照『中國古写經紀年錄』による）。六朝・隋唐の写經が九割を占めていて、全盛を誇つており、六朝では北朝の写經がきわだつて多い。ここで、古写經の例を一つだけ挙げておきます。おそらく、

現在存在している、あらゆる經典のうちでもっともふるい写經であるといつてよいものです。これより古いものは、もちろんあるかもしれませんけれども、それは年号が書いてない写本です。しかし、年号ではつきりこの時代の写經と確かめ得るものは、これより古いものはありません。ところで、この最古の写經が日本にあるのです。そういうことを配布の資料に書きました。『諸仏要集經』（残巻）といふ經典でありますし、比較的短い經典で、上下二巻になつています。竺法護（二三九～三一六）という西晋の時代の翻訳者が翻訳したものであります。もちろんこの經典は、今日の『大正新修大藏經』等に含まれていますけれども、しかし、この写本で注目すべきことは、この巻末の奥書の部分です。当時は、巻物になつていたわけです。筆写して巻物になつていたから、巻していくと、巻末は一番奥になりますから奥書というふうにいいます。その奥書に次のようにあります。

〔原文〕

元康二年正月廿二日。月支菩薩法護。手執胡經。

回宣授聾承遠和上。弟子沙門竺法首筆
受願令此經。布流十方。載佩弘化。速成□□。

元康六年三月十八日寫已。

凡三萬（篇カ）十二章。合一萬九千五百九十
六字。

〔訓讀〕

元康二年正月廿二日、月支菩薩法護、手に胡經を執り、口に宣べて勧承遠和上に授く、弟子沙門竺法首筆受す。願わくは、此經をして、十方に布流せしめ、載佩弘化して、速やかに□□を成せんことを。元康六年三月十八写しあわる。およそ三篇十二章、合わせて一万九千五百九十六字。

現今の大藏經に入つてゐるこの『諸仏要集經』には、この奥書の部分はすべて省かれ無くなつてゐます。したがつて、こういう奥書の部分というものは、印刷の大藏經、木版の大藏經ができるときに全部省かれで無くなつたことがわかります。だから、これは写經にしか残つていなかつて、きわめて貴重な記録であります。

これを見ますと、訳したのが元康二年（二九二）正月で、書き写したのが一番後ろから二行目の元康六年（二九六）三月ですから、だいたい四年後に筆写されているといふことが判ります。もちろん、四年後はじめて筆写されたとは思えないので、訳したものがあつて、それをまた別の人が筆写したといふふうに考えますと、筆写本というのは、作つたものはそれしかありませんので、次の人があれを写すと別のもとの、別本になつてしまつて、それはどこか違うのです。ある箇所を書きちがえるとか、なにかが付け加えられるとか、書

体も違うし、写した人も違うし、みな違います、今日の印刷のものとは全く違うわけでありますから、そういう時代の写経の事情を伝える資料でございます。

この写本がどこから出てきたかといふと、トルファンでござります。トルファンの出土でありますと、吐峪溝といふところで発見され、大谷探検隊が日本にもつて帰つてきたのです。この写本は、紙に書いてあり、きちんと線を引いて写経しています。しかし、その書体を見ますと、竹簡・木簡に見られるような古風な書体で書いてあります。この書体の上からも、この写経が古いものだということがよく分かります。

写した人の名前で、竺法首という名前が出ています。この経は竺法護（二三三～三〇八）訳の二巻本として現存しております（大正藏一七、七五六）、諸經錄の記載にも矛盾はありません。しかし、このトルファン出土写本の「奥書」五行は、本經の訳經年時や筆受者等について記された貴重な記録であり、これまで知られることのなかつたものです。これによつて訳出四年後の元康六年（二九六）にこの写経がなされたことを知ることができます。まさしく竺法護の存命中でありますからに訳經活動をしていました時期に当ります。

後の刊本では削られてしまつたが、訳經史にとつては、きわめて重要な情報が得られます。一番珍しいのは、最後にその字数が記録されているということです。「奥

書」末尾の「凡三萬(篇カ)十二章。合一萬九千五百九十六字」も目をひきます。全体でこの経は「一九五九六字」という字数から成り立つてゐるといふ。これが記録されているのが非常に珍しい例でござります。これは、学者の研究によりますと、昔は竹簡・木簡に書かれた時に、誤字・脱字を防ぐ目的で何字から成り立つてゐるのかを書いたという習慣があり、それが名残として残つたもの、といわれております（藤枝晃『文字の文化史』一九七一）。それが、經典書写の場合にも残つたのだというふうに考えられます。

後代の写經では、大々的に専門の写經生が何人も詰めて写經するといふ、宫廷写經などがあるのですが、その時はたぶん字数を数えて、それで賃金が支払われるということになります。天平写經にその例がありまして、日本の天平写經とは、長安の宫廷写經の制度をそつくり真似して、奈良朝時代に日本で行われたものであります。天平写經は、たぶん、写本の大藏經、手書きの大藏經としては、世界に冠たるものでしょう。中国にはほとんど残つていません。大藏經としてまとまつたものは残つていません。写經はありますけれども、それはばらばらの經典であります。また、敦煌の法(宝)藏は一切經として書かれたものではないといわれています。ばらばらの單經として書かれたものだといわれてますから、組織的に計画して全ての經典を書写しようと書かれたもので残つて

いるものでは、日本の天平写經が非常に貴重な資料であろうと思われます。

先ほど現存最古の經典目録は『出三藏記集』であり、それ以前のものは無いと、申し上げましたけれども、敦煌写經の中に一つだけ断片（残巻）が出てきました。これはペリオ本（三七四七号）で、首題・尾題ともに欠くが、しかしこれは費長房の『歴代三宝紀』所載の「別錄」（衆經別錄）の一部、であることがつきとめられました（内藤龍雄「敦煌衆經別錄残巻」一九六七）。それが『三乘通教錄』第二であります。写真をごらん下さい。たぶん南北朝の齊の時代くらいに作られたものであると思われるのですけれども、こういう目録が出てきております。これが、全部残つておれば非常に貴重な訳經史の資料になつたのでしょうかけれども、断片しか残つておりますので、当時のこういう經典目録があつたという証拠にはなりますが、ひろく利用できないのが残念であります。『衆經別錄』あるいは『別錄』と呼ばれるものです。

「三乗通教錄第二」という文字が書かれてありますが、三乗のいすれにも共通したお經の意味です。三者にまたがる經典という分類が、當時行なれていたといふことがこれで分かるわけです。もう一つ珍しいのはこれは誰が訳したかといふことは書かないで、經典と巻数の下にはこの經典は何を明らかにしたものか、ということを短い言葉で書いてあるといふ

ことです。つまり、経名・巻数の下に、各經の主題を明示し、さらに訳文の文質を評定している。文と質のどちらが經典の訳文としてすぐれているか、という関心が當時高かつたことをうかがわれます。

例えば「三乗通教錄第二」の隣の行、そこに「賢愚經十三卷」と書いてあるのが判ります。その次に「今昔の因縁を明かすを宗と為す」と書いています。「今昔の因縁を明かすを宗と為す」とは、佛陀あるいは仏弟子達の現在の有様、それが過去のどういう行為に基づくかというその因縁を説き示したのが、その經典の主題だという意味であります。そういうふうに中身を短い言葉でズバリという經錄は、現存の經錄には全くありませんので、非常に珍しい例だと思います。しかも、その下、賢愚經の一番下の文字は、「文質均」と書いてあります。その各經典の末尾は、右側はずつと「文（もん）」とあります。左側に行くと「質（しつ）」という字も少し見えています。そういうかたちで、この經典が文に属するか、質であるかの判定を、この經錄の編纂者が判定してそれをこの目録に書き記している。文という字は、これは、文飾でありまして、飾りの多い文章という意味であります。質は、質素、質朴の意味でありますから、なめらかではなく、ごつごつした翻訳調の文章、読みにくい文章ということであります。だから、文であるか質であるかということを、一々の經典に

ついて判断していたというふうに考えられます。

羅什（三五〇～四〇九）の時代になりますと、羅什の翻訳は文と質が均等で、非常にバランスがとれていて、理想的な翻訳だとされていた訳ですが、羅什訳ができる前は、どの經典の訳しが一番理想的かということをめぐって、飾った、中國人が読みやすい文章の方がよいという意見と、インドの經典なのだから、そんな飾った文章よりは中身がストレートに伝わるような質素・素朴な訳經のほうがいいという意見とが対立していました、なかなか決着がついていないわけです。そういう、当時の古い時代の訳經事情がこの目録に反映していると考えられます。

ところで、中国の書籍全般につきまして、大まかに次のようなことが言われております。中国における書籍の歴史について文字を記すための方法、素材によつて大まかな区分をすると、次の4区分になります。①竹帛に書写した時期：先秦～前漢・後漢、②紙に書写した時期：魏晋六朝～唐・五代、③木版で印刷した時期：宋～清、④活版で印刷した時期：清末以後。①は、竹帛（ちくはく）に書写した時期、帛（はく）は絹織物のことです。これが先秦から前漢、後漢の時代まで。②は、紙に書写した時代、魏晋六朝から唐・五代。③は、筆で書くのではなくて、木版をつくり印刷した時代、それが宋から清の時代。そして、活版で印刷した時代、それが宋から清の時代。そして、活版で印刷した時代、それが宋から清の時代。

まであります。今日は、パソコンとか電子メディアの書籍もあるわけですので、⑤という区分も必要なかも知れません。⑤電子メディアの印刷物というのができる可能性もあるわけですが、これまでこういうことでした。

もちろん、これはだいたいの目安であって、当然この四つの時期は隣り合う同士で重なる時期をもちます。まず、①ですと竹簡・木簡が長く使われていてこれが長く続くのですけれども、しかしやがて紙がそれにとって代わる。紙の時代がやつてくるわけですね。②紙の使用が始まつても帛を使って書く時代はしばらく併行して続くわけであります。紙と帛の両方に書く時代がしばらく平行して続くわけです。②と③の区別のモメントは、紙にどうやって文字を記すか、手段の違いであります。②の方は手書き、③の方は木の板に文字を刻つて、その上に紙を載せて、刷りあげて印刷する。筆写から印刷へという時代になります。版木に文字を刻つて、その上に紙を載せて、刷りあげる、これが木版刷りのやり方であります。ですから、まず版木を作らなければならない。この版木を作ることを刻経といいます。経を板に彫るということです。それから、③から④へ。これは木版から活版へという時代です。もちろん印刷になりますと同じものが大量にできるわけですから、大量普及の時代にだんだん移つていきます

これが、中国における書籍の変遷の歴史でありますけれども、仏教の写本から刊本への変遷も基本的にはこれに沿つているわけです。竹簡・木簡に書かれた仏典は、まだ発見されていません。これから出てこないということはいえませんので、あるいは、竹簡・木簡時代があるかもしれません。そういうものが発見される可能性があるかもしれません、今のところまだ、見つかっておりません。しかし、帛に書かれたものは現存します。たとえばペリオ蒐集の敦煌写經で、『無量寿經』下巻など帛に書かれたものが残っています。他にもかなりあります。帛も紙も貴重品だったということはあります。紙はとても貴重品で、中国で紙が発明されてから、この時代までは、そんなに時間はたつていませんから、紙を漉くという技術はなかなか一般には広まらなかつたこともあります。紙は非常に貴重なものであります。仏典が書写されたのは、ほぼ②の時期に相当します。

現存最古の木版刷り経典がやはり敦煌から見つかり、ロンドンにあります。これは、大英博物館に常設展示されておりまして、皆さんも行かれた方はご覧になつておられるかもしれません、ガラスケースに入つております。口ゼッタストーンなどと並んで、大英博物館の宝物の一つとされているものです。これは、敦煌から、スタインが発見した『金剛般若經』（ジャイルズNo.八〇八三）で、その「刊記」に

「咸通九年四月十五日、王玠 為二親敬造普施」と年号と施主の名がついております。

咸通九年は八六八年でありますから、九世紀の半ばにもうこういう木版ができた証拠になるわけです。「王玠という人が二親の為に敬つて造り普く施す」と書いてますから、両親の供養のためにこれを作つて、そして、それを有縁の人びとに施したことが判ります。両親の供養の為に作ったお経だということが判ります。また仏陀が説法している姿を示す、木版の図柄がこの経の巻頭につけられています。これは、巻き込まれている最初のひらいたすぐのところの部分です。右側の軸の所が巻き込んだ巻物になっている部分です。この『金剛般若經』が中国で一番古いものだといわれており、②の時期に属しているが、③の本格的木版時代の先駆けともいいうべき、りっぱな巻子本であります。

先ほど、木版による大藏經が始まったのは、十世紀といいました。これは九世紀のものですから、宋代の木版が始まるよりもこれはかなり早いわけですね。百年ほど早い作品ということになるわけです。一番古いということについていますと、ほんとにこれが最古かどうかということは判りません。一九六六年に韓国の仏国寺の釈迦塔からお経が一つ出てきたのです。その、「無垢淨光大陀羅尼經」というお経は、この釈迦塔が七五一年に造られたということが記録で判つています。

すので、それに納められたということは、それより前に作られたというお経だということが判るわけですから、もしそれが本物であれば八世紀の前半には、経文を刷り上げるということがすでに始まっていたという証拠になるわけです。

韓国では、これを大々的に宣伝しまして、これが世界中で一番古い木版印刷の経であると、一時期いろいろなメディアで宣伝した時期がありました。しかし、それより以前は、日本にある『百万塔陀羅尼經』が最も古いとされきました。ただ、これは、經典を読むために作ったというよりは、供養の為に納めて二度と見ることはないようなものとして作ったから、一種のお守りのような、あるいは印鑑のように上から押してつくられたかもしれません。紙を上に乗せて上からこすつて作ったお経ではなくて、印鑑のように上から押してつくった、文字を押しつけてつくつた、そういう可能性がある。でこぼこがあつて、非常に作り方がつたないものですから、これがはたして木版と呼べるかどうか問題が残ります。これは七七〇年頃日本で作られたというのですから、これよりもっと古いものが出てきたと韓国では今の話を大いに宣伝しました。けれども、以前は、この日本の『百万塔陀羅尼經』が一番古いものといわれてきました。

ただ、世界中で知られているのは、スタイン発見の大英博物館の展示物でありますて、これは、『中国の印刷術』そ

の発明と西伝」（東洋文庫315）という本があり、これに世界の印刷でどれが最も古いかを書いてあります。著者はT. F. カーターという人で、彼はこれを載せ、大英博物館の木版が世界で一番古いと公認していますので、いまのところこれに従えば、これが一番古いということになります。

それから、宋代になると太祖の勅命で、四川（蜀）ではじめて大藏經が刊行されました。これが印刷した大藏經のはじまりであります。宋代の四川省の成都、昔の蜀の国で作られました。宋の勅版、蜀版、もしくは年号をとつて開宝藏などとよばれます。これは断片しか、今は残っていません。日本の南禅寺にも伝わっている。「仏本行集經第十九」の巻末はよく知られておりまして、その巻末には「大宋開寶七年甲戌歲奉勅雕造」の刊記があります。開寶七年（九七四）、勅命をうけて彫って造ったということが書いてあるわけです。この版の作りは、一枚に「十三行ありまして、一行の字詰めが十四字」というかたちであります。これは、勅版（蜀版）の版の様式（版式）であります。

この勅版ができると、宋の皇帝は国際親善を名目にして、中國に朝貢していた日本、朝鮮、ベトナム、西夏など周辺の諸国にこの刷り上がった大藏經を一セットずつプレゼントするわけです。日本の裔然という坊さんも太平興國八年（九八三）に、一セット頂いて持ち帰るわけです。その大藏經は、日本

で、ある時期までは残っていたのでしょうかけれども、平安時代くらいまであったようですが、焼けて無くなってしまい、断片しか残つていません。京都の嵯峨の清涼寺というお寺に伝わる釈迦像も、この裔然がその大藏經と一緒にもらつてきた遺品だというふうにいわれています。

この最初の木版刷りは何に基づいたかというと、先ほど申しました「開元釈教錄」の五千四十八巻をもとにして、その後宋代までに訳された数十巻のお経をそれに加えたのが、最初の木版印刷の大藏經であります。今日、学術論文等に引用するときは、必ず用いられる『大正新修大藏經』、あれはなにを底本にしているかというと、この木版の大藏經が、高麗に、朝鮮半島に伝えられまして、そして、高麗で二度あれを覆刻するんですね。高麗版大藏經は、十一世紀にこれを覆刻したものといわれています。一度目のものは、モンゴルが押し寄せてきたので、それで焼失して無くなってしまう。二度目に、蒙古侵入で焼失した初雕版にかわるものとして一二五年に完成した高麗版は再雕版であります。

東京の芝の増上寺には高麗藏の再雕版があり、それを底本にして、それに宋・元・明のいろんな版本を参照し、天平写經、その他をも参照して、校訂テキストが作られたものが『大正新修大藏經』です。そういう意味で言えば、その源流は宋代の勅版大藏經ということになります。

北方の遼(契丹族)や金(女真族)でも大藏經が印刷・刊行されました。宋の時代はまた北方の異民族が北方に国を建てた時代で、まず遼という国ができます。これは、契丹族がつくった国であります。それから、金という国で、これは女真族がつくった国です。その二つの国でも大藏經が作られたといふことが判つてきました。

まず、『金刻大藏經』(金藏)は、一九三四年(昭和九)、山西省の広勝寺で刷り上がった大藏經が発見されました。これは、発見された当時から、できばえのいい大藏經ということです。評判になつたものです。開宝藏を受けつぐ巻子本で、版式は開宝藏と同じです。なにしろ、昭和九年といいますと『大正新修大藏經』はすでにできあがつております。ですから、校本としては利用できなかつた訳ですね。しかし、その一部が、『宋藏遺珍』というかたちで写真版で出版されました。近年、その金藏を底本として、中国で作られたのが、『中華大藏經』(一〇六冊、中華書局、一九八四・九六)です。これは、底本が『金刻大藏經』です。もちろん、『金刻大藏經』にはないものもありますので、その時はしようがない、高麗版を底本にしてあるわけです。そして、これに後で述べます房山の石經だとか、大正藏經が利用できなかつたような様々な、その後でた大藏經の資料を対校して新しく編集されたものですから、この『中華大藏經』は学術的価値が高く、これ

からの仏教学で、漢訳經典の文字・文章について、より學問的に探求するためには参照する必要が出てくるでしよう。それから、『契丹大藏經』(契丹藏)は、遼がつくつたものですが、これはずっとどこからも発見されず、近年にいたるまで幻の大藏經といわれてきました。

しかし、これが、一九七四年に山西省應県、仏宮寺の木塔第四層にある釈迦如來像の胎内に、巻子本十二点が封じこめられているのが発見されました。そして、考古学の新しい発見があるとかならず載る『文物』(六期、一九八二年)という雑誌にはじめて紹介され、その後、一九九一年には『應県木塔遼代秘藏』(山西省文物局・中國歴史博物館主編)という大冊の図録・研究書が中国で刊行されました。これで、その内容がかなり判るようになります。その後、日本でもこの本を使って研究が進められております。『中國仏教石經の研究』(氣賀澤保規編、京都大学学術出版会、一九九六)がそれであります。この木塔から発見されたものが、契丹藏の一部ではないかという説が強まつております。ですから、近年になつて、契丹藏というものの片鱗が少し見えるようになりました。

資料の写真版で示した『中阿含經』三十六卷は、発見された契丹藏の一部と目される刊本ですが、木版刷りで半分真っ白のものと、後から申し上げる『房山石經』の中に残つてい

るもので、拓本を写真にしたものと同じ箇所の文章を比べてみると、全く同じであります。ですから、房山石経のうち遼代に刻られた部分は、たぶん契丹藏を底本にしてつくられたものであることが、だんだん証明されてきております。この両者を比べると、違いがまったく無い。その異体字なんかもそつくり同じですから、契丹藏をもとにして『房山石經』がつくられた可能性がたかいと思われます。

次に、「石刻の大藏經をつくる—『房山石經』の偉業」—と、ここだけは資料にテーマをつけました。北京市の西南七〇キロに、房山雲居寺と石經山があります。石經山には九つの洞窟が穿たれ、その壁にはびっしり經文が刻まれています。また境内的地下からぼり出されたおびただしい石經（石板）は、現在特別の収蔵庫に整理・保管されています。一九八五年から一般に公開され、誰でも見られるようになっています。私たちも一九八九年四月に北京からバスでここを訪れました。本日、ここに出席しておられる先生方のうち何人かは一緒だつたと思いますが、北京大学で日中禪学シンポジウムに行なったあとのを見学・参観で、房山に連れて行つてくれました。バスで日帰りができる場所ですから、非常に足の便はいいところです。そこで実物をみてきたわけです。

近年、完結を見た『房山石經』（拓本の影印版、全三〇冊）、これは、拓本を写真に撮つて綴じたものです。これは、一九

八六年から九三年までかかつて作られたものです。『目録索引』卷30によれば、一一〇〇種、經典目録の言い方ですと一〇〇部の刻經の仏典がそれに記されてあります。そして、卷数にしますと三五〇〇余巻あるということになります。それを刻んだ石の数ですが、一五〇〇〇余の石版に刻まれているといいます。正確には一四六二〇の石、ほかに石が欠けてしまつたもの（残經）を全部集めますと四二〇石、洞外の各種碑銘八二石ですから、一五〇〇〇余になるわけです。こういう膨大な石の經典群が出現したということが判ります。それでは、誰がこの途方もない難事業に着手したかといいますと、隋代から唐代にかけて生きていたと考えられる静琬（？—六三九）という人です。かれの発願—「法滅の世にも生きのびうる法藏を造ろう」—から始まつたといわれております。この静琬という人は『続高僧伝』とかに伝記は立てられていません。ですから、『続高僧伝』を作つた人は道宣（五九六—六六七）ですから、道宣の生きた時代とあまりにも近かつたせいなのか、それともそこは長安の都から遠く離れていますから、それほど静琬が有名になつていなかつたからなのかな、判りませんけれども道宣の作った『続高僧伝』の伝記の中には、全く触れられておりません。そういう人物です。ただ、最近の研究によりますと、天台宗の南岳の慧思（五一五—五七七）の弟子筋に当たる人ではないかという研

究も出てきていますから、あるいはそういうお坊さんなのかも
しません。

この静琬によつてはじめられたこの石刻の大事業は、門下の道俗に受けつがれ、あるいは朝廷や、在俗の外護者たちの熱い支援を受けて、遼・金・元・明・清にいたるまで刻り続けられました。まさしく一千余年にわたる、奇跡ともいふべき大偉業であります。石に刻むのですよ、大藏經を。一つ、二つの經典を石に刻むのとは訳がちがう。大藏經全体を石に刻むなどということは考えられますか。今日のような、なるべく労力を省いて簡単にやつてしまおういう時代から考えますと、全く奇跡としかいよいよがありません。おそらく万里の長城を築くよりももつと難しかつたのではないでしようか。よく中国の文化遺産というと万里の長城といいますが、おそらくそれにさえ比べられないだろう。万里の長城は歴代の皇帝が権力にものをいわせて造つたわけですが、こちらは民間のお坊さんが造つたわけです。もちろん、民間の坊さんは、時の朝廷からも援助を受け、貴族、豪族の多大な援助を受けてはいますけれども、しかし、一字一句を石に刻みつけたのは、外護者たちではありません。そこが大変な、まさしく奇跡のような大事業だといわれる所以であります。

先に、九つの洞窟があるといいましたが、その真ん中辺にある第5洞を雷音洞といい、その外壁に静琬の「題記」が二

カ所にわたつてあります。その「題記」は欠けたところがあつて、いまは読めないようになつていていますけれども、これは、以前に拓本をとつたものが残つていて、それを合わせてみると次のように書いてあります。「今、貞觀二年(六二八)に至りて、已に末法に浸むこと七十五載、仏日すでに没し、冥夜方に深し。瞽目の群生、茲より導きを失う。静琬、正法を護らんが為に、己れの門徒知識及び好施檀越を率い、この山頂に就きて、華嚴經等一十二部を刊す」。ここには静琬という名前が出ています。

また、もう一つの「題記」(「題刻」)でございますが、貞觀八年(六三四)につくられたもので、六年後につくられ、なぜ房山石經をひらいたかという彼の目的・意志をはつきり表明しています。「…永く石室に留め、劫火に焼けず、千載の下、惠燈常照ならしめ、万代の後、法炬恒明ならしむ。…この經、未来に仏法難の時の為に、經本を擴充する(なぞらえ満たす)という意味でしようか、經本をつくつて、後世の經典が地上から消えたときにこれに基づいて經典を作つてほしい、そういう意味でしようね)。世にもし經あらば、願わくは輒がるしく開けること勿れ」。だから、經典が世に流布している間は開けるな、地上に残つてゐる間はこれを石室からもちださない。もし地上から經典が消滅したときに、はじめてこれを開けて、これを使って經典をもう一度地上によみがえら

せてくれという痛切な願いがこの「題記」に込められていることが判ります。

静琬の末法法滅の強い危機意識は、同じ時代を生きた、三階教を開いた信行（五四〇～五九四）、淨土教を開いた道綽（五六二～六四五）、天台の慧思（五一五～五七七）、淨影寺の慧遠（五一三～五九一）、靈裕（五一五～六〇五）、この人達と共に通しているものがあります。それは、北朝で二度、三度と

断行された廢仏事件において、經論が焼きはらわれ、僧侶が殺された、苛酷無残な法難の記憶と結びついているにちがいない。そういう事件がまた起これば、坊さんは殺され經典を伝える人はいなくなる。あるいは、經典そのものが焼き払われて地上から經典が消えてしまうという危機感です。果たせるかな、房山刻經の歴史をたどると、安史の乱（七五五～七六三）では刻經事業はいつたん途絶えています。武宗（八四〇～八四六）による会昌の廢仏（八四一～八四六）においても重大な制約が加えられた、ということが判つております。

しかし最大の危機は二〇世紀に訪れました。一九四二年（昭和一七）、中国の華北に侵入した日本軍は、毛沢東の軍隊（八路軍）の根拠地に打撃を与えるとして、房山の雲居寺一帯を空爆したのであります。雲居寺は全壊・全焼し、周辺

に建つ堂塔もことごとく被災して廢墟と化しました。北塔のみが辛くも残つたというありました。私たちが房山を訪れた一九八九年、雲居寺はちょうど再建中でした。今は立派に完成しているでしょうが、それは見ていないので分かりません。その壊された、日本軍が空爆して焼きはらった、房山雲居寺は一九八〇年代になつてやつと再興されたことになります。

ところが、さいわい石經山の石經は、山に穴を掘つて秘蔵したその石の經典、それから地下に埋められた石經とともに、大きな被害を免れることができました。日本の侵略軍の戦火による危機を辛くものりこえて、千年の法藏は、いまわれわれの前に、かけがえのない人類の遺産として、その全容を現わしているのであります。石に文字を刻る伝統は、仏教以前の中国にもありました。儒教では「石經（せきけい）」と呼んでおります。しかしこれほどの大がかりな長期にわたる石刻事業は、儒教にもなく道教にもなかつたのであります。

また、これらの龐大な房山石經を造営した人々の、さまざまに願いや祈りの気持ちは、石に刻まれた文字となつて、こんにちに伝えられております。単に經文だけが残つているではありません。これを誰が作つたか、どういう意図で作つたか、それを書いた題記、刻記がたくさん残っています。それらがまとめられて『房山石經題記彙編』（書目文献出版社、

一九八七) という本が中国で出版されております。これも中国の仏教がどのような人々の信仰と支持によつて生きながらえてきたか、そして、今日に伝えられたか、それを知りうる絶好の史料、非常に貴重な資料になつております。

以上、見てきたように仏教の聖典が大藏經というかたちで今日まで伝わり、しかも二〇世紀になつて、『大正新修大藏經』として印刷・刊行されて世界的に流布したが、それ以後もそれに匹敵する、それにとって代わりうるような貴重な資料が少なからず発見・紹介されています。それにもとづく新しい研究は、しかしまだようやく緒に就いたばかりであります。

その方面の研究に、今後、新しい展望が開かれることを期待しながら、私の話を終らせていただきます。